

予防鍼灸研究会（SGPAM）

第 7 回定例会抄録

テーマ：ムクナ豆

2021 年 11 月 28 日

目次

ミラクルパワーのムクナ豆で QOL を高めよう	三浦左千夫	2
パーキンソン病とムクナ豆	西川典子	3
ムクナ豆が奏功したパーキンソン病の 2 症例	岩崎真樹 湯浅龍彦	4
パーキンソン病にムクナ豆を用いた一症例	金井正博	5

ミラクルパワーのムクナ豆で QOL を高めよう

NPO 法人-MAIKEN 代表、長崎大学客員教授 三浦左千夫

「抄録」 私とムクナマメ（八升豆）の出会いは遺伝性進行性ジストニア（瀬川病）の患者様との出会いでした。その患者様の家族が「その豆が無いと娘は正常に学校にも行けません、探してください」でした。小生の仕事柄殆ど毎年ブラジルの田舎町で過ごすことが多かったので、ブラジル食文化の中に豆は欠かせません、すぐに探せますよと安請け合いました。ブラジルの食料市場に足を運び探しましたが、見つからず?? 「フェジョン・デ・ムクナ（ムクナマメ）」はどこにあるか?と尋ねると、肥料屋又は家畜飼料屋だとのことでした。半信半疑で持ち帰り、その家族に渡したところ、「当にこの豆です、これで娘は動けます」とそのムクナ黄な粉を食べ始めてから、正常に動けるようになり、現在は立派に社会人生活をしておられます。このような成分を含むマメならばヒトの健康維持に QOL を高める意味で広く食用として利用されることを期待します。

略歴

1968 年 3 月北里大学医療衛生学部卒業

1968 年 4 月慶應義塾大学医学部寄生虫学教室入局

1968～70 年 ブラジル・ペルナンブコ国立大学熱帯医学研究所

1988～90 年ブラジル・ペルナンブコ大学付属免疫病理研究所（L I K A）

2011 年慶應大学医学部：定年退職

2011 年日本赤十字社中央血液研究所特別研究員

2010 年～現在：東京医学技術専門学校（非常勤講師）

2011 年 4 月～現在：ブラジル総領事館医療相談員

2013 年 ブラジル・セアラ州・F V J 客員教授（寄生虫学）

2016 年 NPO 法人MAIKEN（南アメリカ文化遺産研究所）理事長

2018 年～現在：長崎大学客員教授（熱帯医学）、松陰大学看護学部非常勤講師

パーキンソン病とムクナ豆

順天堂大学医学部附属順天堂医院脳神経内科准教授 西川典子

「抄録」 パーキンソン病治療薬である L-dopa の薬物動態の研究がライフワークで、ムクナ豆とは 2005 年に愛媛に移ってからの付き合いになる。ムクナ豆は、古代アールヴェーダの時代からパーキンソン病 (PD) 患者の治療に応用されていたとの記録がある。ムクナ豆は八升豆とも呼ばれるように 1 粒から大量の実を結ぶ食品で、L-dopa を豊富に含有する。PD 治療薬の要である L-dopa は、薬効の高率のよい発現のため、また副作用の軽減のために L-dopa 代謝酵素阻害剤との合剤として開発されている。一方ムクナ豆は L-dopa 単剤に近い組成であり、薬剤として代用するには有効性・安全性が不確かで、PD 治療の中心的な役割を担うものではない。しかし、とにかく薬の数が増えてしまう PD 治療において、症状の軽減を図れる食品は魅力的である。そこで、私たちは健常な方でも PD 患者でも安全にムクナ豆を摂取するために、末梢血 L-dopa 濃度を測定して、L-dopa 治療薬との併用時の、より適切なムクナ豆の摂取量、摂取方法を提案している。ムクナ豆の安全な使用方法を知った上で、前向きな療養生活の楽しみの一つと位置づけていただければと願っている。

略歴

愛媛県立松山東高校卒業後、信州大学医学部に進学。卒業後、信州大学医学部附属病院 第三内科に入局。長野県内の病院で研修し、2005 年愛媛大学医学部附属病院 薬物療法・神経内科学に勤務。2018 年から国立精神・神経医療研究センター病院 脳神経内科、2020 年から順天堂大学医学部神経学講座にて勤務している。

ムクナ豆が奏功したパーキンソン病の 2 症例

岩崎真樹 1) 2)、湯浅龍彦 2)

1) 木更津杏林堂、2) 鎌ヶ谷総合病院脳神経内科

「抄録」 背景：PD は、振戦、固縮、動作緩慢などの運動症状に、多彩な非運動症状を伴う。その背景に黒質ドーパミンニューロンの減少があり、こうした中で、効果不十分例や、ウェアリングオフ/ジスキネジアなどの運動合併症をきたす例が増えている。PD の治療目標は、線条体のドーパミンの安定的供給 **continuous dopaminergic stimulation (CDS)**にある。

目的：今回ムクナ豆を食することによって、症状の安定的改善の得られた 2 症例を紹介する。

結果：症例 1 は、50 代女性、PD 罹患歴 11 年。薬が増えるとジスキネジアが出るようになった。これに対して、ムクナ豆食にて症状が安定した。本例ではムクナ豆併用によって、PDQ39 が有意に改善した。症例 2 は、PD 罹患歴 6 年の 60 代の女性。振戦と固縮でピアノが弾きにくくなった。ムクナ豆食を勧め、症状が安定した。こうして、2 例とも、ムクナ豆を抗パ剤と併用して生活設計し、抗パ剤は補助的に使っている。その結果、ウェアリングオフやジスキネジアが減少し、良好な ADL が得られている。

考察：PD ではさまざまな合併症によって治療が障害され、QOL が低下する。PD 治療の目標は、CDS の確立にあるが、これら 2 症例では、ムクナ豆食が有効に作用したと考えられた。その背景には、ムクナ豆に含まれるドーパミンとその他の様々な活性物質の存在があると推測した。

結論：L-Dopa の治療効果が減弱し、ADL の低下した PD 患者 2 症例にムクナ豆食を試み、いずれも ADL が改善した。ムクナ豆食による副作用は見られず、PD の食事療法の一環にムクナ豆が貢献する可能性が示唆された。

(542 文字)

パーキンソン病にムクナ豆を用いた一症例

木更津杏林堂 金井正博

「抄録」目的：パーキンソン病（PD）患者さんで薬の副作用を気になさっている方が多くみられ、食事で改善できないかと問われることも多い。ムクナ豆は **L-dopa** が多く含まれている事で知られている。PD 患者さんがムクナ豆を自身で栽培し、調理し食用しているケースを経験したため紹介する。

対象と方法：76 歳男性、農業、ヤール 3 度。2011 年発症。2015 年当院受診（当時ヤール 2 度）。左手の振戦、肩の痛みを認め、左足の動きが悪くアンバランスで、（最近右足も動きが悪い）腰痛あり。便秘症、時々嫌な夢を見ることあり、起立性低血圧あり。ADL に支障（ボタン掛け、茶碗を洗う動作、パイプのバルブの栓を閉める動作）をきたす。2016 年より **L-dopa** 製剤と共にムクナ豆 1 日 10 g を煮豆にして食用開始し、動きが良くなる。以後、ムクナ豆栽培と農業を継続している。現在 15 g 食し、薬の量も多少増えているが、鍼灸治療とムクナ豆を併用し、日常生活に支障をきたすことはなく、趣味のカラオケや自彊術を続けている。

考察：罹患 11 年目の現在、加齢と療養期間の長さに伴い **L-dopa** 製剤の量は多少増え、歩行テストや QOL 評価は少しずつ下方したものの鍼灸治療と 1 日 15 g のムクナ豆摂取を併用することで、農作業や趣味のカラオケや自彊術を継続できていることから、日常生活に大きく支障をきたさない一定水準以上の QOL・ADL が維持できている。

（590 字）